

西川伸一の オススメシネマ②

マンチェスター・ バイ・ザ・シー (米 2016)



新宿武蔵野館はよくいく映画館である。新宿駅から至近で、しかも昨年一月にリニューアルされてきれいになった。チケットカウンターには上映作品の空席状況を知らせるモニターがある。そして、ここに来るたびに「残りわずか」と表示されている映画があった。それが本作である。気になって仕方がなかった。時間の都合上、恵比寿ガーデンシネマに観に行った。

主人公リー(ケイシー・アフレック)は米ボストン郊外で便利屋として働く。腕は確かなのだが、顧客とすぐにトラブルを起こしたり、パブでは言いがかりをつけて客に殴りかかったりする。「なんでこんなにすぐキレるのか」といぶかりながら観ていくと、倒叙法でリーの過去が明かされる。ボストンと同じマサチューセッツ州にある小さな港町マンチェスター・バイ・

ザ・シーで、彼は妻と三人の子どもに囲まれて幸せな日々を送っていた。

ある冬の夜、二階の子ども部屋で子どもたちを寝かしつけたあと、リーはビールが飲みたくなって近くの雑貨店に買いに出かける。部屋の内暖炉に薪をくべてから。ところが彼はこのとき痛恨のミスをする。薪がはせて火の粉が室内に飛ぶのを防ぐファイアースクリーンを立てるのを

忘れたのだ。帰ってくると自宅は炎に包まれていた。一階の寝室から逃げ出した妻ランディ(ミシエル・ウイリアムズ)が子どもたちを助けるため家に戻ろうとするのを、近所の人が必死に止めている修羅場だった。家屋は全焼し子どもたち三人は焼死した。失意のどん底に突き落とされたリーは妻と離婚し、マンチェスター・バイ・ザ・

シーを離れる。ところが、同地に住む兄ジョー(カイル・チャンドラー)が急死して、リーは久しぶりに帰郷する。そこで、兄が遺言として、自分の息子で一六歳のパトリック(ルーカス・ヘッジズ)の後見人をリーと定めていたことを知る。彼は兄の家でパトリックと暮らすことになる。部屋に三人の子どもの遺影を飾るが、このときリー

は感情を抑えきれず、窓ガラスを拳で割って大けがをする。憂さ晴らしにパブにいけば、そこでまたけんかだ。彼にはこの町にいたことが堪えきれないのだ。挙げ句の果てに、道で偶然にも元妻とも再会してしまう。「乗り越えられない」とリーはパトリックに打ち明ける。そして、リーは後見人を旧友のジョージ(C・J・ウィルソン)に委ねてこの町を後にする。

父を失いながらも奔放な高校生活をエンジョイするパトリックとは対照的に、リーはけつして笑わない。笑いはその瞬間で永遠に封印されてしまったかのように。そんなリーの陰影深い心象風景をケイシー・アフレックは見事に演じきって、今年度のアカデミー賞主演男優賞に輝いた。当然だろう。

ラスト近くでパトリックが食べかけのアイスクリームをポイ捨てるシーンはいただけない。それはともかく、そこそこに小さな伏線が張られていて、笑わせてくれる。おかげで、「人間はそんなに強くない」とのメッセージが説教くさくなく胸に響いてくる。連日の大入りに合点がいった。

(鑑賞日と鑑賞劇場：二〇一七年六月四日・恵比寿ガーデンシネマ)

(にしかわ・しんいち／明治大学教授)